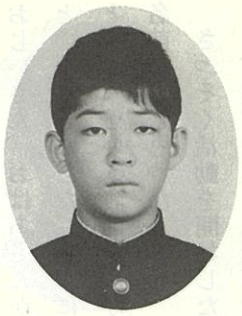
最優秀賞

ぼくの体にも　マタギの血が

秋田県田沢湖町立玉川中学校
一年　田中　一



「んだなあ、あのどぎだばすげかったな。熊よ、みねつたわってな、こっちゃダダダダど走ってきたけおな。したば、となりのわぎや者よ、どでんして鉄砲うづどごだったけおな。それでよ、おれ『やめれ』ってさげんだおな。」

「なして。」

「それだばおめ、へだに遠ぐがらうって、ておいにしたらたいへんだべ。よっぽどそばまでこねば、うだれね。まじ五間くれそばさこねば、だめだな。今でいえば、十メートルだべな。」

「そったにそばまで。」

「んだよ。わげじぎだば、おかねくて足ふるえだもんだ。今だばなれだな。なんたってよ、それが一番のあぶねぐね方法だがらな。」

「してなんとしたの？」

「してよ、近ぐまでひぎつけでみんなでいっせいにダダダダど鉄砲をうったおな。したば熊よ、谷さゴロゴロどころがっておぢでいったっけおな。」

隆吉じいさんは、しわくちゃの手で鉄砲をかまえるまねをしてそのときの様子を詳しく話してくれた。ぼくは、今にも、熊がぼくをめがけて、ダダダと走ってくるような気がして、心臓がドキドキしてきた。みんなも、きん張した顔で、じいさんの話に聞きいっている。

この四月から、ぼくたちは、新しい中学生として二階の校舎にうつった。先生は、まだ大学を出たばかりの熊谷先生である。名前のようにヒゲがこくて、モソッとしている。初めての学活の時、先生がおっしゃった。

「みんなで、こうやって勉強できるのも、あど、一、二年だな。どうだ、今年は、学級として最高の思い出になるような、おもしれごどやってみねが。たとえば、昔の玉川の事をいろいろ調べるというのは、どうだ。」

ぼくは、なるほどと思った。昔の玉川は、どうなっていたか、ぼくだって全然知らない。以前、となりのおじいちゃんに聞いたことがあるが、ほとんど忘れてしまった。それに、もう数年で玉川は、

なくなってしまうんだから、今やらなければ、もう調べる時がない。

これはやってみるとおもしろいぞ、と思った。まわりを見わたすと、みんなも同感らしく大きくうなずいている。博之君が大声で、

「賛成、先生、それやろで。」

と言ったら、みんなも大賛成ですぐにやることになった。調査の内容は玉川の歴史、玉川のマタギ、玉川に伝わる民話、伝説、民謡などである。方法は、部落のおじいさん、おばあさんから聞いて歩くということにした。調査には、「ふるさと調べ」という名前をつけた。夢のある名前だなと思った。

さっそく活動を開始した。五月にちょうど、熊が三頭とれたので、その猟に参加した隆吉じいさんを、たずねてマタギの話を聞くことにした。隆吉じいさんは、熊でも、投げとばしてしまいそうな、がっしりした大きな体をゆさぶって、玄関までぼくたちを迎えてくれた。部屋の壁には、頭のついた大きな熊の毛皮がかけてある。熊のはくせいがギロッとこちらをにらんで今にも、ぼくたちにかみつきそうだ。隆吉じいさんは、熊の毛皮の上にドスンと腰をおろして、マタギのことについて、いろいろ話してくれた。

特にすごかったのは昔の熊のとり方である。昔のマタギは、「たて」というやり一本で、熊と一対一で格闘したという。熊が立ち上がったところをのがさず、月の輪めがけて、「たて」をつきさすのだという。なんという大胆な方法なんだろう。生きていくための、本当に命をかけた戦いだったに違いない。

「昔の人だば勇気あるもんだなあ。」

とぼくが感心して言うと隆吉じいさんは、

「あたりめだ、玉川のマタギは、度胸も腕も最高だ。おめだぢのじっちゃも、その又じっちゃも、そうやって熊と闘って生ぎできたんだ。おめだぢだって、そのマダギの血を受けついでるんだど。」

と誇らしげに言った。ぼくの体にも、勇かんなマタギの血が流れているのかと思うと、体中がポォーと熱くなってくるような気がした。

玉川は、後、数年で玉川ダムの湖底に沈む運命にある。そして、ぼくたちは、この美しい玉川を離れて、別れ別れになって新しい土地に移っていかなければならない。そこに、どんな生活が待っているのか、だれもしらない。でも、ぼくは、たとえどんな所へ行こうと、くじけずにがんばっていこうと思う。くじけそうになったら、ぼくの体の中を流れる勇かんなマタギの血が、きっとぼくを、はげましてくれるだろうと思う。

帰りぎわに隆吉じいさんが言った。

「えが、おめだぢ、玉川のマダギの子孫だってことを一生忘れるなよ——。」